源氏淺聞抄

序

宮内庁書陵部
宮内庁書陵部蔵書

ちふくてんあり三ヶれ大事のひとつふうさてあしふ夜やけて
うれめちを思ひやるもちて海うて御枕うたにはいるき
祢のあといてゐるれあるもちれいうるかうこれをみふと
海てさせ給てうれ対こう御めとこふも心へてたちれふかうし
けるき御心ちとなるひきるかて侍ち用へはいう給ても
考つんるく立くなれ姫君ちれ松やと笑へ志の
たひしらいとうしく笑へうと見給へとるれ海さてと源氏の
ふまの〳〵う

見かうすほううれなのふ志ちの

なれち海ちて立て海ちれる
ちふんの年もうてぬ正月彩るまいのやうる源氏ち大辰
へわう給て御さううもいはのうう御うけるかち
うれうもて女の御うちちもさ〳〵形
源氏
なのうい年けふあうめ美衣
ちてち源ち海るんちすは
あうれたち年ちいと涙ふるのち
ふりぬるく人の涙ちうち

七梯

神宮さまへまいれちんすりの聖の方へ入給ひ先八幡進の
きこしめ給ひ後の方へにゐ給ひ給ふやうひて
くり給ふもいとをかしきれも源氏殿所仏ばかりもたもとすた
なれたりさまをゆきれ給もてんとゐるけちめて聖の方をねて
入給へて源氏さすがふるもてくり給へんとをのれ
ゐ人ゐも情るやとおもひ給へて給ふ
長月七日ばかりにあらるけきのへをゐ給ふやういとあを
こし秋のもの哀なる松風すこし吹のもせばうもるき小萩を大き

にてかくるめるる所住ゐるしるしれる井さすがにかく
かんつらさのおもをさしこえたれ君ふきてなのうちもあいひ
ゐるもあるふるもてゐ神さひうるれ事とふれ
神さへ聞ていとえんゐる小たをやかなるひうてて人けすく
志めくるあり源氏日ばの法するも志めれ人なきまひゐる
きれさう木をいたう折てもまつるをみすれ田一所入てかをゐ
見をこ系角をこ系いうきなるいらゐきふゐの方心を

月分

みをやゐ神はいうきもこぬ

大文人のこゐ所ゐ

とふらひ

みやす
神かきはしるしの杉もなきものを
いかにまかへておれるさかきそ

氏
おとめ子かあたりと思へは榊葉の
香をなつかしみとめてこそおれ

日比の内物語なされなこりをしきうへかゝらひ給ふ存なから入ぬ
いとあはれなる宮をなかめて伊勢へ下り給ふ事をう
らみすく給ふ哉なかりしおもひのなき御物語もいひやらん
かたなし源氏も心つよからすなき給ふ女も涙にてえ思日

給はぬ御きしき只心くるしかなしと見えさせ給ふ

暁のわかれはいつもつゆけきを
こは世にしらぬ秋の空かな

世にしらぬとはふるきことに

松むしもわかれをおしみなくなるを
大かたの秋の別もかなしきに
なくねなそへそ野への松むし

わけをつくさせかへて給ひぬ宮はみやこに出立給へは源氏
より典侍の御かへし榊にゆひつけて
八嶋もる国つ神も心あらは

あらぬ日くれの中をこゝに祝

こゝろのハ女別南るうせ給れきり

玉津神宮千たゝ紙中るゝ

なゝ代まつやさゝむ

同九月十六日ふ歌こゝを

西行のこゝろきゝ申れきたに大因ハ行ふやすゝ出られ

いふ心用しる

こゝにのうひて南り行て（所名れ行）か玉松行り

うれうこゝをけゝりきゝ思ふれと

心の中ゝあるか郎ゝき

みゝていらゝたゝれゝて志ゝれ玉行ゝき（毋宮十四

朱雀院ハ御代ゝいて行ふを給るて八着ふゝて行け

るゝいゝ車ゝれ神日ハふを行ハ刑ハ武ハるゝ

ゝいゝゝゝみゝ知見車も通いゝ松ゝいて行てゝゝ

ゝんゝ西れ古人ゝれのふゝ二條ゝんれゝゝるれ

梯ゝ行て志ゝ所へ

ぬゝすゝけふハ切ゝもすゝ川

やゝせれ波ゝ神をぬゝゝや

苔にきれゝ又の日せゝきれあるゝゝ

さてこの川やうせのはてぬまにて
伊勢海にて波のおりしおこせむ
源氏ちいとあらんれる名残おかるゝにて雪いとふかくふりあた
り方をたづねやうこれもなし
なつ坂山を雪ふる角にて
旅のそらにまよいていとゝ心ぼそくおもひ給へ入れまれるす
院れんとうまうでるやうにて御ことはりとはし
ゆきて御かとも行幸あり内裏いとふ萩つゆの御ちとれ
御ふね長まうたてはへ又源氏の大将をこそ天ぎうろう

尼とおもひて大ふのおとゝへたてれくはまひあるせをとく
れゝ中させたまふ長こゑもおもしろくて十月一日かれ
させ給るきさき女中あり宮に欲給ふ人おろし萩つゆの
中こそ源氏ふるよ出心れうちをまして侍らぬ御ふけさ
大后れいつまにてこゝいはんせにいてうすさむ笑きう
四十九日ゝ廿御更衣こゝやすおぼゆるあつまり給しとるぬれと
心ゝれ中すこゝ家ふうつろひ給ふ方こそすれ中るれて大こゝれ
ゝもこちもはは法ゝうこちもこゝふ御まへれ又ふの下葉ちふゝと
兵戸ゝの文

かけしろんたのうゝ　雪やふるきん

下葉ちゝゆゝ年れ若うれ

氏

ちへうる池のかつられさやけかる

月ゝ河ゝ雪をうぬうるゝた

年若て岩井れ水もこゝろうち

月人うけのあせもゆゝうぬ

たゝる月ゝ内侍れうふ雪ちふてひ行みうの御心

ちへ雪ぬゝきれう源氏ものゝ思ひのふ思そたらゝる

いきもみうようひまう重月行ふうう流れたう海

ゝうあれうゝ思おうゝうようう源氏もおほゝ海うけ

うれうゝ雪やみゝきうは御心ふうう又かれ無めん雪流れ

ちふゝうて行ゝ思ゝあうう本の姫思いたうふ思ゝ源氏

伊勢おうかうもあやゝ神うゝめゝゝうゝきかのたうう

自夜れ内侍のうゝこれ行月うふ又うん れ雪ふ思うめて

ちゝ志ゝたゝゝますひまふ源氏ゝあいたう志ゝ行ゝいゝ

うゝきてんれおうとれう腐まていてうひ行ゝうめゝゝく

かゝうゝれおうれうけるゝぬちたいめんうれとあうれ流うぬ

うゝみもひゝゝ海ゝうさうのぬゝてうゝのひとつうけうる

源氏いとりつくりてゆかふよ

心くるかくしぬるすゑ
あくるをしふるあつけても
歎つゝ京のうせをかくすせも
もしもれあつまはるるく
いはるもをりけんなてをたてもをれもをに月れ
らはの二條乃方改方のまこひぬるをふ人出見をうは
るもまんうとおわすいとはまし又なつれ中文を
ふかつけるひきうて世の中をうまいなうくをうきり

源氏をを東文のはるをるふよ放院のはるあはるをを
りくを思るはふたかの御ひるぬはるるもはもをを
つ四はるていはるる折まる中文をちうきまるはきれも
方法のつねのをりめはてるぬるかるけるををいはるる
心きうてすをもをを笑をする源氏思ひ入ぬるあはちふ
二夜をうはるはるをを逢るあひんはるるを源氏をしるるを
おるはせる所心をやふ逢ををいるるかるけるまれも
をるるるれるをきはけふるきるはる
いるいくをるるるるるるん

[illegible]

[illegible]（中人）

[illegible]

なつかしかりしてまうえんきらうんとうのうてこうまつ

すると[illegible]ふたたうんえんにはいてまつ九月十日

あまりのふる妹のもとへなるにあいもるはいまの

おもひ　紅葉村　笑つて秋はのかれ　なるを見給て

家ちもえんにはいぬてきうつれ文行ちわとやを律師

ふて　おとすは帰りて天台六十巻をよみ小法師ちも

いてろへてきふいとせてきこうあすを山ちれめてこれ見

おとるひいてるを見あへる律師れ念仏流生桜の不搭と新の

ておとるひ[illegible]ふちをうしゆもしなるやよみまこをわるる

（りんな）世ようのふをうきこうはさもこうよれ

岩れうけみちふるりしてんと

いふんをうさんしも花をおとるれ　おりのこれ自彩の法

師ちれ出たうすき紅葉ちしに菊れとるれとあ元先

まつをてかしとる次あつきれわるふはられいなる六

うれよも法もしるの次法世なのかしはをあちるる

[illegible]

やうみて

弐

あさちふれ[illegible]のやうに君をたにて

[illegible]

雲

[illegible]

あさちふ[illegible]

[illegible]

弐

[illegible]

七十七

秋[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

なれたる人ゆゑうれたうたへまいり給へと
中宮こゝろにくしとおぼしてとゝまりて月にいでゝ十六夜
なれど殿はいときよらかやのわたりにはなちて笑ひ
いとゝあらんかぎり十八夜九夜中宮より源氏はたうへ
九重に雪や降るらん雲ぬけ人乃
月をゝもふる心ひとつ郎
月ゝけちゝんよの秋のかゝるぬを
へゝつゝ君はたゝもあるゝ
中宮殿門を開てんと笑へ給へるぬれなる月夜のはゝ源氏へ

木ゝしの吹ゝけてもまちし海の
おもつゝあれてゝも海ゝきゝ
あゝちゝ思ひおもひもはゝしゝ
第ゝつゝゝひて
あひすて思ふ乱はのゝゝ
なへてのゝ秋のまゝゝやみる
第のゝゝあゝ侍ひゝる源氏はたへつと
ひしる車いまちみちをもよゝて右大臣殿へひつ
こゝゝれさふひまをこれゝのゝゝゝゝこの

この内は袋に三ケれ大井のそれひとつは院の一めくり

乃日中之のたうえ

弐

別れ　けふたうんとなさん人も

ゆきあふことをいたきのまん

芝うの

おくの山ふかくもあるとまんまとゆきめくり

けふたうれよふあふこちして

十二月ゑ中之御くらたうの山の雪をはらいむとんは

はふ様の戒名より御おち様川の伊都ちうはらてはくれたら

しはふはうるうすうゑ中之すうまつてうはまいうはふ

月れすむ雲のあるとけて雪ふるとも

これなのやうにふるやはるん

大うれうさまつけてふんとも

いりうれ世をうむきをつへき

む月れせちをもうきしたもえかえるも

うひきいてくんくみる保武を系行て

なうあうはあうれ伊家をんるかに

まつうるうるう書うう行

伊ちるかへ行を入道れ之をきはる

[illegible]

立ちぬはれ　つゆしもぞ

年はわかき世の中をつねなきものとなりて三位

中将なりて内大臣　掃部頭　顔の字をちい

ちさいとなりて　ふるきて　文字なりて　ひあつとも見え

のかしこきすがた　中将右源氏　左　かちなる中将　なげ

ていたもしれもの　ちりひきさもうちさて　秋の

紅葉　ちりなりも　ちのやうなる　中将の　ハッ

九　[illegible]　あとひなる　[illegible]

さいらうこれなりけるもの　もとをはなれて　ふるちぬ

源氏の君　ちりけはなるいたも　おとけてあるひなれて

あるひのてたきれて

うせもとけさひ　あるとつむ

なしぬ　ふるひとと　[illegible]

石　[illegible]

咲　[illegible]

ちるとも　[illegible]

なるあとて　[illegible]

八 花ちる里

[illegible]はいけいてんとゆゆしき女御の位にたちて世の[illegible]
源氏はいまゝ世にすぐれたるものとのみ思ひ[illegible]
あひだ[illegible]この君の[illegible]六條京極[illegible]
かゝる[illegible]胡夕[illegible]源氏はたゞ[illegible]
[illegible]ものとやうおとしまゝ[illegible]源氏もあるべき事[illegible]
[illegible]月の[illegible]雲[illegible]の[illegible]たゞ[illegible]
[illegible]家は[illegible]

あつまふ[illegible]ひ[illegible]源氏[illegible]
足入[illegible]おもなる[illegible]
[illegible]一夜あひ[illegible]人のやと[illegible]
なるまゝ源氏[illegible]車[illegible]
[illegible]一部[illegible]

おちぬ[illegible]
[illegible]
[illegible]やとの[illegible]を
この[illegible]ふ人[illegible]
[illegible]

あるむすめのみな自筆もてうら

こころにかけしかたもなきにたれとよにかよひてまい
けいきんの御うへにかよふわすれしきとさいひけむそ
なかのむすめしますめ御おもかけのあらはれたるをみてわかや
うちしぬ跡まちうちなくたまひきもきこるよいかにとかくとの
さまふ

月窓

俤みしへはさいとかなしくもあはれとこそはす
いかにとかくてぬ脈跡かなく

といふんなり

氏

橘の香をなつかしみほとゝきす
花ちる里をたつねてそとふ

これは源氏花散里巻

人めなくあれたるやとは橘の
花こそ軒のつまとなりけれ

紫式部は源氏のあはれなる御ありさまをうつさんとて
うちいりおりてかれこれ花の枝か西わたりにかけさせ給ひて
思ふやうふたりしていとあつしふかやうやうとの頃こそこれ此の
うへも忘らぬ下掛なかしこそうきせのなき海やまも

かくし給ふ御ゆくへもあきらかならず見えし源氏後まで也とも
なきよりにおもひて六条の院にすませ給ひてのちなるよしみ
えにしるしひて住給ひしも其御方にハ此人をすへ給ひしなり
この巻にて見えし花ちる里とよの人いひならはせり此おかしう
みしか其の後なるとも源氏花ちる里とよはれ給へ侍りこれ
人の後あはれといひけんまでの御おもひなしかると心へよ
三の君にも花ちる里といふ事心へなるし但桐壺の巻にいへ太上
天皇となり給ふつねの天皇ともなりて事あるよし見えしや
ふしん

九 次广

世中いとうつりかはりしかはさる事のなきまゝにせめて
しのひすかたになりてもこれよりなきまてもやとおほえ給ぬ
これハ花宴の月夜の内侍のかみに源氏思ひつきあひし
給ふ事なり次ハ東宮すゝ父右大臣のむすめ之内侍のかみ
にまいりてしのひし時かの内かみ之源氏思入給へり折々かよひなり
ていとめくらふかりけれと御几帳のあなたに女房なともありて
はらひて源氏いひ給ふへきよふもなし内侍のかみの内侍の
なるへきおとゝはたなり給へり又心ある内侍のかみいへて

さいめんゝ給はられすきたにふるあひのおひ海をれいさう
ふさあいたさうもい　ふるあひをもるれおひをたこと上の姫の
ようこぶをえきめをふ
もち給ふるこれゆへ源氏きちゆゝれ内るおとゝますこと
おとゝをゝ給て朱雀の御ゝおかるあるのあるおわき
さ紀きすをもめ給ふ井ふるれを見をゝるにゃ
給ひて女御ゝ入ゝぬ源氏れにんを志ゝて都み
あらんをゝをこれを海さをてをちかをゝをゝもやる後と
笑ゝをちぬるかめすまいむをゝて人の位ゝるをゝる
きれいまを古をゝる心すをゝてあるれあるに海をふ

朱雀

敬をゝ給ふ給へる人をけゝ又ちゝをけさん位をゝいと
おるをちるひけまをすきを　むゝ古きれ上の笑ゝるけをゝ人おき
給ふのを古さゝを給ゝるゝ都にたをゝまるゝを友位ゝを
をゝめるれ給ふまやを古あるきれをゝをもりんゝるし
なゝたの大殿へをゝ給御車もあるをゝをゝを女の
まを給ひをゝをゝ給へゝ口ゝをゝ給ゝけをゝをゝをゝ
をゝをひきをすへ女は源氏れをゝまゝ人をゝをゝをひをゝたを
さいめんゝを給て故院の御様い云をゝをゝまひいをゝ古神も
ひきをゝを給をゝをゝ給ふあかゝ公紙ゝをゝ海をゝをゝ

[illegible]ものとおぼえて
ちみさはいとふあふひれ御ちたえすりわ君ぢめと
さいはの君して御使さてのちみ[illegible]
多へ山ものえて煙もはるやと
あるれしてやうらうこしろり
なさ人のうれやいとへさらん
煙りとなるりー書ねるるてち
さるも中納言殿君ふ御なるいさまいちるれひとへこ海り
殺ひてこ海やるかしひ殺ふいへえふこ[illegible]ちいあれはちち今

川ふ

いつちえるいとものもねふちいれて
心ひとつるけくられ

とふ方れ人ふ二條院のかへ殺とさふひちちへけも
ち或ハ世をれてまいれあるひはこもままいるへちち
ちれれ殺ものもわとるもと而せ殺ひ一る車
かもるうすさてよはるさおるもるへこちはふの
ないはかしもちるてたるもふふあー殺へとる
うへこふもすれこるふていたいたはふのする
おりけるを年月へとうはへもゆちんことと

ためのえとゆゑふかねすくもちよるあさふすあかつき
はまて御こうれねこうして紫のえとからるさ所の源氏さや
たいるよう所へるおなやせ所へるうけれしあるうあさぼきう
あれをもしいちれ上これうけのやうにやせ侍るあるれるり
さうれよりさせ所へを服忌源をひるうきてえたこせ所へる
ちるいうを思ひかうし

式

所ふうしてさすへぬるも思うあうう
ちしぬうえんれうけハちるれし

紫

うれてもうけうにこ海るものるうも

かうえをうんてもるうしさうて海
ちしるれるようひうしうもさてるさ所へうを海れるれ
うるをうこうら見る人れ中まるれるうれ海わられ所へ
花ちうちのいまこ度えすうつ中やなをんそこうも
又よ有人も所へを源氏物うたわてもちる重へをいうふて
ちうう所へるをいけいてんうすまてを上ちを上こえ所に
しれ所をとふ夜ふうして立入所へうちう風をなるあて
ちあ所へをこえ所わをふ又四ちるちうをなるをうえ秋の花
やうのたまふる世界のちあ所へふ夜ふ紀月乃やうてぬるうるあう

月ふか

あひてあうふかの月の神

やとは月はへぬるとなる

こうふ寄れんかう吳て　歌て

月新れやとれる神ぞせそとも

弐

ゆめてもあるとやあるぬ光を

りめてとつねるすむつき月新乃

ちちくもらんこるふなるめて

ゆめはちさふといとはつ行ふけはち笑こう之こめ尺ち

三はなれきんのみとも又こと町のふとみる紫上神めと

ゆ神なの君ちかしきさ人なふと月こ事とさふふまて

おなの月後へ源氏

弐

きせる紅源の川こちは見こや

ふうこうをもちのなうん

おなち

源川こふふもきへめこ

ふうしなのせをも海うすて

家う御方のうるひたちもるこてうきちゆちえんと

なうんくいむちはれはるさふこて祝ゆつけて

おとも行ちせにこのふくへ月こうは　弦の出やうれ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ちゝ親人

ひこつれてあかひかさをしけれかさを
思ひつゝ浮しうきれ見つゝき

源氏も御一るより松かけて佐やうれかるとおほして神に
奉りし給

うき世をもけふはわすれて海ん
名たゝるゝ須磨の神まかせて

まれ折るゝ給へる御佐かめくらさを見かんてうらく
みなひまゆ浮もの字も松くるゝ森木ふかくおうつれなう
前の月もよしゝ給へるかゝけうかもうれしけ

給ひぬるこまゝめのよ人ちゝまゝさふれと見えてけき
月に入らつるれを佐すによりてまて

なれけれもいふならんよとへ佐く
なりゆく月も雲かくしぬれ

冷泉
氏

けふは又へ佐ふるゝ年の給ふちるまつる桜に佐まて

いつか又春の都の花を見む
ときうしなへる山かつにして

いまは佐はけれくおもはせも佐なしきは今宵ぞ
佐きてくしちるらくるまれと折まい

ふるの都を立かへてみる

やすらひもあまりなれぬる都とて立ち帰る暁

旅れ所すがらうらふてみすゐきあけさせて流れた

ゆ行へをもしらぬ人をいてさせる

式

いけはすれをそへて繁つる

今を人をもうれきまれ

紫

たうぬ今にくものまくれ

ひとをもこそ〜こそめてうる

乃すをも所なりけるひてをあるまれを汐立れ

をもうて申れ所ゆかのうしくつさ行ひぬすゐの大江辰と

いひきふ人を松をうて志をこにはけ所

大江辰ハ毎年天満宮の御れ祓銀ゆ伊勢をみ奉して大和路をゆて所の玉ゆ祓き難波ふて祓ありて七日ゆ大江の儲ふを出ひ十日に入京しをふる

うふ玉ふ名をおしきる人をもう

り来も志をぬ所ゆをやせん

四海ゆをを月ゆれ歌を角ふれと

ふうむをを所ゆ松れ雲ゆの

おをしゆすを所を所の年れ中納をれりをれ

つををひきん家ゆをれ海つをゆ入をすゆ

ある山の中なり所もてみるに波たるすゑ
やなどもたつていあつかけるなりやうんもあつてうゑ
ぬらひたるうゑ水やうにたるに　たいしんさいなと所のに
足所あつてたるさせ給へやうにるめれたるなりて都の
ものうちとて波たなる人いるしてさせ給ふ紫式上と人の
ものにのたまふるさるやうに給へくさせ給ふえつち

弐

雲隠のあるれこまやもいるるん
波の乃うち人たるるるうら
おるる身後の四位れ舞はみちれるもあやるる

中納言とふ女房のうえ所ものるに花を結ぶ

弐

ナンすれうのみあも成きん
しるやくあれいるたもうん
あるるうれ所も同ふれ中ま
なるう所にあるあるんつも立るも
くゆう煙よりうるるる
八月末　たるるうるる中るて松雪れ
年ふるあまるるみるたるつも
紫の上れるるるあるれるたるて

紫

うゝ人のしわくもゆゑ心ぞ
波路へゝるゝ舟乃ゝもを
かれ行雁へゝゝ行るゝ六條れ
御使なつるまゝゝゝみちゝ
ゝつゝけてすゝつゝふゝん而なり
うゝさめゝ行雁ゝれあまとゝひやま
りゝゝゝてふすまのうゝ人
行雁や志ゝひのゝん あゝゝも
ふゝひゝゝゝゝ家ゝるゝゝ

ゝあり折ゝれみおゝかゝゝあゝれて
ゆゝゝゝて二百まゝてかゝれ
ゆゝゝゝゝゝゝゝのゝ人ゝゝゝかゝ
ゝゝゝゝ

いせ人の波れ上ゝゝ
ゝゝゝゝかゝゝのゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝ中ゝゝゝれゝ
いゝまゝ行ゝのゝゝゝゝん

花ちゝ里より

あれ海さる新れ出ふをるあつて

志けくに家の桜の風

秋も如ぬすまに色いと心ほくの好風るうらすこ

しとをきれと切年中如をせこゆ新をいひきんこ

波すはくをけふいちちく少てきるあれるおそ

うを而れ秋のうきの御まくうをて人するて五やまみ

ををはるひをめを内まして枝をををくに出あし

をを好をを波を変をんをちをを風れつを

見を成上枕をををうをきんをををかをるを遊れ

あをいとすをゆれをひをを好ひて

恋ひてをくを福をふを波ち

ふをををうゆやふをらん

いをつをくをれを紙をを尺而あるをを松き

好て御まくを波ををくをのをを乃を上をれ

いををを校つをれをををて彩を絵ををををををまつををを

をを心のををるつをを文ををををは せんをいのをるを風をををれ

ををゆふ苦ををををんをを風をををふいを好てををすを好を

御好を而をを波をて大をいをんあを　志れんを文を海をを

御心ざしふかきあやの御ことも一きはに釋迦牟尼佛
乃御事ともたちかはりよろづにきよまはりたえず浄けゆ
ふるきもさらひのぞきて六根ゆるもちいさぎよきまで
をはり 磬橋とて磬の声をきゝ磬の音たえず 磬のなきさて行はらせかたれたとに浄め
おこなひ行て後れはつるときは阿弥陀御前につき御詠すゝめけるへし

初尾て逝し人のつゆなれや
旅の空より都わびしき
かさねつゝ蓮の葉の上のつゆもこぼるゝ
ありける世乃友なくとも

心からここをいでてながしてを
雲のよそにも見つやむかしの
ここに世いでてうきかずかなる我まで
待ちにおくれぬ身となりなむ

このたび八十の秋なりきそれと覚しいてたてまつりあはれに
近うしも聞ひやりぬる月のかげの君旅立ちて
見ぬ雲のしたしくなりきむかしあらん
身の都ちかきなれども

殿上の御あそびにさし去りぬこのたびうちのみかどの

なつかしく物かなしき折ふしも忘れがたく覚えて

うしとのみひとへに物はおもほえで

左みぎにもぬるゝ袖かな

これは太宰大弐つくしよりのぼりけるこれ大弐のむすめ侍ふ

しへ女たちのまいりをとのちきん（花ちる里又は御かた）御こひ人にて

年比なりしをも父の大弐にくしてつくしへ下りけるが今又

父にくしてのぼるなるが須磨に源氏須磨におはしますをきゝて

舟のうちさへなつかしく女ともにかに大弐の子の筑前守を

御使にて消息せさせ五節の君も消息をかへしたてまつる

琴の音にひきとめらるゝつなでならば

（猶豫の心）たゆたふ心君しるらめや

御琴の音を波風にひきさして行へしゆへやゝふよろうか

人ありてひきとれつなのよなたゝを

打返しや須磨のうら波

源氏君へのなかにてさすがあぢきなく思ひけるとや

女なりみちのぼりけり雪ふりあれていとゝ心ぞきたちまさり

（のいとちかく鳴く声の）

うしろの山に嵐鳴くしかもさびやまとやくなりんとなれ

（しうしろの山に柴ふりの物ふすふるなり）

まれ山のつれ柴ふりのふすふるなりとやせき

式

山ゐなれ居るゐなけれ共も

ゐるひゐるゐるむゐるゐるゐと人

きいの海ゐるまれ行ゐるぬ天ぬあつゐふちゐあゐれゐゐく

式

いゐゐれ雲踏ゐ高ゐひゐん

月れ入ゐ行ん　ゐゐゐゐつゐ

友ゐゐゐゐゐ舟ゐ唐の月ゐ

ひゐゐ行ゐんの家ゐなのゐ

年かゐぬ天れゐゐゐは空笠おゐ　ゐゐて行ゐ

ゐゐゐゐおかゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐゐ行れ櫻

ゐの子学行て見ゐゐつ是ゐゐゐ一ゐ勢のゐれゐん

ゐゐいゐゐ心ゐゐ

式

いゐゐゐ　ゐ人ゐのゐゐゐゐて

櫻ゐゐゐ　けゐゐきゐゐゐ

かれ以中將ゐいまゐさいぬれ君ゐゐゆ源氏ゐ行ゐく

ゐゐひゐゐて世れゐゐゐて行ゐふあゐゐゐいゐせんゐゐ

ゐて俄に都ゐゐす海ゐまゐゐゐ源氏行ゐゐゐめゐ

ゐ嫉ゐきゐゐひゐ行ゐゐゐゐ中將ゐ位置ゐる

行ゐゐゐゐ海ゐいんゐゐゐ行れ行ゐゐゐん

やうなり竹あるうきしわ石れて松のち屋をう
ろうるあるうるはうしおまるさ海ふとも雨るつきて必へく
山賤めさてゆしをれきぐちるたあるをびの物まぬさしぬさうちやつまてこちたにく
しくまつふしいう内ろやうるてをうけるをけぬき
いふうびもてるしおつるしいうびくろうるにふまれてきまうう
ぬ中ひるるちもてるしく中くみるも濡まれめてたるあま
もあちりていたもれりてまいれをちまへまりて付うに
年ふんちるとせおふるさ海くやすけるき卯れうへを
さへつりゃちうぬきて行ふおいけるいおれの行るすう
海ろるまるふうなるたるをあして日ちあるるうに
京へうて行ふ門うるけるいうて えひるるう濡をくを去の

きうつきれうちとりろ参まるすん〜行る足ふ人濡をふ後う海や
ちうくうるていあるいふもれるるいてかふるあつるるうるきちまの
す海るうあうれ君るを中中将れ御おうてをう弱いとき
笠うてまつう行ふあすいをいふさいをうひ行へう
弐
姫うるをいたまれ君ゆをて足ん
うう山うさうを海ゆる屋うる
双中
あれるる屋れをこよを立ひうま
うれれ都にみちや海をうん
弐
雲ちうう龍ふうも京うう足よ

家を出て五日目に
以中
ふるさと雲井のひとう福をうる
はるかなるしるべ友をひつ
海辺にちかきまれびとの名ばいとなつかしき三月朔日
己れ身なりかくれもひあるべき人ふこれ日みるきたるふよる海辺
うしき人やうらうつるもゆうべたるめしてあせ
ちかくひきたる舟をめしいそぎてせめてもち海へまくるう
京よりすぬるふたんやうしめて舟をて御ちくさせるふ
ちしき人をつくりて西のせるすをとるふて御舟な

よるとなく
氏
きたりたる大海ふるふれきて
ひとくるやち和ちるかき
氏
八百萬神もあるれとれるすらん
たりせるつくれるきれて
かやうにすぎ所所俄に空うきくれて地名神ありひち
うさ西とふて人くあ乃あ
海をひきちくらんやうるみちてかるして
きたりいふあるべ人をこるうるたるう家をれるれぬし

ゐんとあまたゝびいたりあへりいとのおほうたうれ
さほうもなりおはしてゐたるえすうめすにたまひけるあうそ
むたうのうくとうえけうられ中の詩五れおめてするおもて
源氏をえいまてうとおるすふおむつうくゝ山住おもうへうく
ゝうなうぬ

十あうく

ゐをゐ風やますす神ゐうしたまりて日はうなうぬうしれ
事うすえはをやうふさ立れきはるあはるうをねて
海ろうはは御美ゐ古院の御門みえはるてゐるかあゆれ

ふうあすううて御ゐをうひうて行ふ住れ神の道
ひきたまふ海にうやゝ西のはて山うをうれ神
かうはは御をもふまいうゐんとなき入てうちうけはへふ
人をすゝ思れるのをらくとうて美のんをせ源はきをひ
と海れるんちして御参はやほうをゐ光をすまれ美乃
つけをふやゐ光をあうしなれも源をうゐをうまや
人えはふをこをはうふ神はうはて御めはうて嘆うふゐう
にきうなきをたちいをやうゐ舟をて人三人張はやを
をちしてまいうをうひいてきれのをう海のかう

あしの志ゐちより源氏にもむすまいらせ給ふれ
ば三月朔日ごの日れうへ向ひ給ふれ夜あしれ八道ふ
住吉れ神の美ようけ給ふて十三日みあしゐ面なる志ま
らせんふ申ようひまふけて波うせや海とうるす汐干れ
浦へてまうれと二西ふ給ふらあしの美れ山より源氏へ
ひとう中ゝ入れとちうんうもの美ひ面ゐも志の船
とうれとなふちうかんと思ふこれ毎めてうつる
ひしあはを三月十二日うゐ面ちいとる祝ゐれとる
時のまとうへとなをあやしれまてうゐるうせのんふゐ石れう

百

波てうふやうにのうゐ波さ給ぬ毎ようゐ車うてまつの
うすゐと日ゆうゐ中あうて石れうて尺て海つるうゐ志を
ひうれまとひのふる巴ちして住吉れうゐを入道ちれうをて
まつる入道れ尺ゆうゐ面ゐうれ面ゐもおうゐきうを
さうすつきるうきれまゆれたこうひうて海れようゐる
すまれへき山水れ住ゐにいゐれ御堂れうて三時を
こゐふうよ毎れ面ゐうつれ田のうをかうれ面ゐれ波のうひ
つむつきいゐれくゐ町ゐれ赤ようけて志あつめうれすめ
ををたうしゐるれちて志へれ家るすう海せうう

小方ちゝ年は尼ゆゑてひとつ所にすまはせ給
今のうちに心あくたらしめさすいまゝ年六十ちかくなり
者みとも六十人もかゝりてゆゝしく心ちつまりて京れ
みもかゝはらふ紫れ上のあちれるしはたらきもゆゝしくすま
ちはふれ君ひゆゝしるちはし
ちゝちゝたちも浦つゝひして
めれまへうにゆゝはあちゝはるかるすゝはて
弐
あちゝみふ波はは波のあはさへ
はるゝはゝすめれよの母

ちゝはゝはひゝかう
日分
あちちゝてあちゝはるみゝ母の
ちゝはひちゝはゝかも
ちゝふれは心ゝう箕ちなるぬひちゝはれはちぬきんの
琴袋ちゝうゝいて給へちくちゝはゝはゝはある
ちきゝひちゝすはゝ給へちんおゝへの家も波ぬちはきて
ゆゆれは心ちせはれはちゝ人ちゝ舟ちゝてちゝへあり
入道もえちゝて切法ちゝたゆゝちゝいちゝ酒いれちはに
すて仲世も之ひ出家れ又のちれ世ちゝ仏修行れ

さ海も三ひやうゑ夜れいたるとき〳〵ちかのゆたん人
ゑひ〻琴かとりふ海うて入ハひゑれ法師うるうて
たゝ〻ゑれをひきいてゝうゝるくゑ和御うゝけまいせ
ゆ供の人〻うもさけ三ねゑうゝてたのつゝねうすをぬき
御位ねゑうこゝをひ入道を也むすめれ事ことすかうるゑめ
ゝゝゝ山おまゝ而れゝ海ゑうこゝをゝなゝ志ケ風ゑけ海
めゝゝゑれをゝいふのゝち海ゝるもたゝかゝれゝてたゑ海

川方
まゝをひゝて所〻〻くねゑゝ那
たゝ門ゆゝて入ぬゝゝゝん

ゝふ音れんゑゝ

八月
ひゝゝ祢ゝ男も志ゝぬや つ是〻せ
三ひあゝれゝゝさゝゝきを

弐
猿衣ゝゝゝんゝさにあゝゝかね
まれ祢ゝ義も むすゝん

ゝ新尺〻れ近へ御ゝまれ四ふゝなゝめゝゝ紀文道を成
たゝて尺ゝる又れ日おゝへのやゝへみゝゝ海のくゝみ美れゝゝ事て

弐
たゝゝゝも ゝゝぬ雲ゑゝ ゑゑゝひ
かゝめゝやゝれ 本すゑゝゝゝ

入道も人志違須まちゆうておくへまゐらかまはも志らまれ
ち御使は、ゆきまてかへすなへて尓しぬあまも久けれる
きりむすめらまつしけるはふゝれはふはしいてんまき
もさいりしらはゝはし取りてはしにさこへゐて

入道

なかむらんおなし雲ゐをなかむるは
おもひもおなしおもひなるらん

又乃日せんしかきて人志れぬ心ちしてとてなよひらうすやうに

氏

いふせくも心にものをなやむかな
やよやいかにとふ人もなみ

あかし

おもふらん心乃ほとややよいかに
またみぬ人のきゝかなやまん

手のさまかき様都のやむことなき人にいたうおとるまし
上すめきたり紫のうへすゝむかりけるに秋になりて御ひとり
ねもはかなくおもひしりて入たまふおりおりかくしさせ
給へ八月十三日の月のおかしきほとあたら夜のときこえたり

月宮

あたら夜の月と花とをおなしくは
心しれらん人にみせはや

こいふ所の心も不ちを浦なれてやかて御志やうやうまゐりて

四石の上はうへもめてたうしまするのあるほうらく
尺つゝ所ふるわりふちゆ尺ほうし入れ自分も都
立つて

秋の夜は月けは弱ようあるほ
雲かたうけれ時のまも尺ん

ちひろこちてたもつさうさうの位あてをすほ
るきは松の福さしも心あるさほあう
むすめすませるかゝたみ光源氏さまの御とう志つらひて自れ
いとへつきさまれ戸ちきはつきてるもつ四ろう

月分

海され戸をやすひるをさちめ
いふあけきふ秋のるるも
ちふんこむすあれうにて御うに
むつをかゝうあるする人氣
うこ世は美もるをさむやと
四ぬ衣手やて海ゝる心うも
いつをゆめとけうてうん
ろれ夜すあひ尺所心ちもほうてつを
いゝけ夜れるもうのめふさちし所後胡乃無ハ

人ゝや見んとあめんと思ひけるさ海まかてなし給へてこうまも
おいひさしかれあふれよきやうち海ちらんとつきてはつひ
おりふ福もえもてちやさぬをもいふくなかへ源氏ハ都の
紫の上の心をつくし給ふもあいなくし恋の思ひなし出松原て
いはよりも海をやさて紫の上のかくへいとあはれなき姿をそ
見まつりしと明石乃上の(れ)てをろのあはれし給ふ

志ばしとまつるかくるかはあれ
みるあハれのすさひなれとも

とありふれてよそにかけにうきうき給て

うきなからもなつかしき契しを
松よう波ハおへしおもひせ

年もくるぬ都にはに朱雀院の見なかる御薬のおもし
ますますあしきいかめしくふかしはこれはあ見るとの御姿
に故院乃見へ給へる御前のはかりしのかとおもひ給ひて
源氏のはたなにとかみらにの給ひふしみ給ふしあ見あらせ
給ひしほみかし御めなやう給大きにさはりなるや見ならう
はおりしちの二條太政大臣かくれ給ひぬさ海へおのはとしらけ
きかれをあこともにこれ源氏にかりしかかをくてかくしつむるも

かるすすろれもしねをすとたちれ好ふの石ちて六月ち
世界たちなすするり好へてた七月昔めりうへされ近へこせん
くちりぬ法ねれてちをなるひ好かしあきしち入ちそもの
つふれちり保氏もう色しに好ちるうしてたくちをけるを好ふへき
てち女れ名詩かるしくおるりうちるすあちつたち好ふへき
ひちを色いちりもゆくけちり好て世れ琴のちわ学好ふる
ちすくれるちをもけちるうち絶していちえすてかくく
れるりて京へむちえん事をたのの近へる世ちるけるをん
ふちのるりさちをひむせちるもちいちりなり

年

此度ちちけりはちりちゃく
烟りハれるりしたるひりん
かさ法めてあるれちすのこひち
今ちひちをうきみたるせ
加よとりちせ好ひ一ちん世琴ちを又ちあ、する面
れ形えて女のうたにちあ好へも
ふちりたなのあるる一ちを
つきせぬ祈るやうけて悪ちん
いふちもるれちりすちひちを好ひて

氏
逢海この形見に契る中なりの
しら雁をことかりし佐しなん
きち路ふあしたちさふらしき波を
氏
打すてゝ行もかなしほらし波の
名残いかにと思ひやるらむ
廿
年経つるとまやもあれて浦波の
くはらるゝや身をたくへまし
とおるひきるまゝなるをあはれにおもひてつみ路へと
なかしところえぬ入道ち旅の佐志やう来上下いかあう

いはのまふしあくまんとみゆけふ春るへきかられはしやうそくふ
入道
しほ波ましちかきあまる旅夜
志ろしけしとや人のいふらん
氏
形見にうらふへらもはあふよの
日数重ねん中れこそもと
とて御身に副るをまゐらして今はそ御つま了又入道え
はるい海て御たくりやて
入道
世をうられおもし志ろしも身をかて
なちこれきしるえとてものれ

氏

都いでし其れ名残りおしからめや
　年ふるさとを別ぬるあさ

とておはしぬこひ給へる御袖の雫ひも旅路くるみち
さりごころしなれぬめ給へる御まくら打ぬるさまを
入るちる名残おしく哀れまさり住なれし御つかひをまり
給ひてなみだをふきて御被衣をまひていそぎ都へ入給ふ二條
院をたちしつきて都れ人も御供の人もよろこびあへきもゆ
しき由て立ちでさぬ程なくりよの住所あらたまりすれ
ふりれ権大納言なり給ふ御よろこび人くなともゆるへきさう

りよの位にあるかれこうし木れ其にあふ人ちすめしるて
御まいり給ふ八月十五夜なれば御みとむくしゆかし給乃
宴もさるて今よくまかりやとおもせられ在かこ御まさ給て
　けるこふ恋しくこふれひまなれ
　　けしき深かし年も経にきり
うつりし栄えしめて
　文もし疑めでてあひまゐる時ほどもて
　　けれし其れうしこおもする
かくてありしへくの旅波まつけ

なげきてあうれうの御言に
うつやと人をこひやるうれ
父うくてのうしみちつの君れうまうさ侍る
ぞてけうれうせうう
人言
すまれうにこそ舟人の
やそくちる神ちうせうや
氏
くりてちかうやまもしし
名残れ神のひうこうし城
十一月ちつう

この巻に源氏院の御八うう又まえ御位う侍ひ侍ひ朱
雀院うあうせおふあうれ上う二月十六日あうまう姫君を
ううおへう源氏いとめつしくおわしていたに都ふむこて
かるうとおもせう勢けつうんと女ぞたうする侍ひ宮
ううつき人うれをあやしおれせうそもれおるうを
口おうとおうしきれけううけのうも侍ひうう人をうし
ぬうにうやうる人なれをたうもまおひて
氏
菊てうつぬ中うるうハまう
別うきおうあうあうきふ

のゝと
おつまれ別をたうむかてにて
なもてんうに考ひやいせぬ
四石ついなうふふてるすまきさ返れ行いせきう
氏
いはしうも神おきんて女るう
よちへてなつる岩れたいちき
入石ちうひるふしてるるにむそおうたてまつる
いまういけるいはういてるるとふへす
四石上
ひとてなつるも神れねるさよ
なるふもうれけちうまり

これ御石ちきうひて源氏あれとるのふの話
つ紫上ちあれ石なうそううおちにとひう
さうの心を
月夕
みちはうおうちふうあか
うれちよて和る角てまうる
ちふ音のふあり
紫
うふちるひうあすとも
りまて燒うちうちふ
あ那心うやとて

詠まれし世をうら山ゐ切めくて
ふるぬ浪ふ〜うきをつむ分う
又月みるをあり〜れ所思のいるあ〜れをなげ〜ひうあ
ゐ〜ゐ〜ゐ〜いるぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜
式
うら松や所をもるれうけゐいて
ゐふのなやもいてうらん
数ゐ
数ゐるぬうぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜

十人ばかりとくかちちをとりのへむしにさすとこれをもひ
なほあらしきいとちかりうるはらもあり乃上舟にて
住よしへまいりて舟をあらきしにはつるるをみれともこの
きはひあるさにみちて神をうちをもつけたるかはかの
いとたのけふあすはうちてきんことをくやく
おもふ御車をとるふるをなりなすれはらして乗れ
はうけちをえみてまつらは大阪にのはるくきこと
舟へ多くれ雲なるはふもてしみるはかるも姫君れ教
なるぬはりてあらしまを思ふいとく御社はかりを

おとうとゆいとたるをれとうちはてとするぬ所の
いちのすんを神をみりはすまへはあすけふち
なるをとてちへをとふせんとてきとうぬるをとを
ならはへとなるをれちをへをとをちへをすを
神の祝はつへきをはてはをあるふうれ
うつやうれはすまをれをいて神のはたすけと
をかうはる源氏をちはあるはちはひて
住吉れまつをあをうきれ
神のをとをけて

あふさかたのいせ

氏

あらしし波のひまをも住まれ

神ちをかけてこやうちも

てれつゝてふあらしれ舟ふなへをめぐりてゆきれたる

ちきるとゝのふちんまかとて御車乃うちふてゝくるた

ち雄波なるまとすとひ舟ふこゝろ御車のたちて

ふところを海ふけりける法かみ志ろ紙筆ち御車ふ

たてまつれたちたるかふふてあつれらへる

氏

舟をつしこゝろをまいまても

めるゝあひけふ えゝちぬゝふ

いちゝをれしを蛙ゝかゝけるゝ手をるさて

数ゝて雄波の事ちひるさん

ゝ舟をつしこゝるめきん

雄波けちゝへのつきふゝの御ちへあゝゆふゝふみちて

あゝへゝあらゝを新ゝ海ゝ析ゝなれて

月分

和歌れゝに志ゝわみちくれをゝをゝるゝ

あゝへゝちゝてゝゝ峰ゝてゝゝ

ちふんこあゝれ上ゝのひ月海ゝ受ゝて

あつけられむしるしにとて孫廣

ふるこの時のあるやうにて

又はあるひはおとるまじうるこゝかあるこゝかいまの世

の世者れなるれのみふるるてさてもかの所えを侍婢れ

はいつきたるつねなりてをすて所のあるもの都まれるり所て

りもの世宮ますこゝかあるる孫はたのさやまひしなりてをす

所ちを尼ますりなりひめ源氏あるるるて酒りなりをを

所えの御をえ毎のむかるるたる所なるうるるるなりを

ゆいをして七日八日なりてかるれなりきり源氏より菊をあと

のるこうりなりふる所えをたもけんしれ御やなひむをあ

ふりなりて今れみるるをまるなりをなりなる雪をえれ

りをなれてふるる日所えを

氏

ふるるれひはのるをさを宮をなるを人乃

あまるけるらんやをるるれた

ををるるをふるるるるるをるるを

をを身るれるれるるるるるるるを

菊　よもきふ

源氏すまれるるれなりひしれ都まををるるはを

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

為むけ乃うらゝ　かけてちうん

をれうきわもはなれにしひこるきあやめ一人たち
うゑれぬまこよるもちうゑ　さ古本帖のうちうひく
ひとをわれよあさりみるまなりてもわうたちさくゑある至
もうるもこむくれうけふ法のうてうれ白山ひやうゝ
ち住ねるゝうちうまるけすたにみうされて源氏の都ふ
かうゑはてたひゝうゝまて祝あゝふにすゑつむすを
せううこゝろゑへきやうもゑ　ゑうたかこうなうきう
う行ふきうちまてすゝ　ゑふ外自のうゝひゑ行ゝゑる

爰にはまた　ひうちれうやうこゝゑ行（ゑ）ゝさゑて名ゑいとゑ
うてちゑるうゑゑゑゑ　ゑうゝ法うたゝのこうゑて

ちきゝ人をさいふるたなのひまるきん
あれうるやゝの市ちへうゝ

これゆふ雲ゑ源氏花ちう里へおゝますみちゑ　雲ゑ
花のちうゝうゝうゝを　うゑ行ゝてひうちれゑゝうるいゝ行ゝ
ちゝに人けをちきゝゑうゝられうあゑいゝてゑもきゝゑ乃
ゑゑをうゑれもちゝてうゝひゝて入たゝゑゑる古ちゝゑきの
すゝてうゑちゑ

[illegible]

ふるさとも[illegible]

女君[illegible]

しへ[illegible]

萩[illegible]

[illegible]

年[illegible]

[illegible]

よもぎの[illegible]

二條院ひんがしの院へおむかへ[illegible]

菊　せきや

かの[illegible]

[illegible]

いし山へ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

山ぢちとうをいてくるを　いうしきゑのあうう山より
あはせてゑあり

式

うくるにゆきあふみちをたのしも
あすはひあしやまろかるのうら
逢坂のせきやいかるせきかるれを
たけきあけきれ中をうらん
かくて山ぢをゆのみうれくまゐれ河内ぢきけし
けるをうれさいひてあるにかて源氏をたのゆえて
まくうくむくうてあるのちやくをこなひのくまて

をめくて二條のゐんかくの院といふ所ちくの人法ち
すませをふうち

十二月合

舟をちを源氏のたとれ御けくまくを内へまくをを
をふ朱雀院を伊勢へくたなひくを大極殿を
をれのくををををくをを内心のめを文をくを
けをふあうにををへあり空を心ちくくをて三月
なれを内をやうをくけくをれををまくあをを
くをこの心をる　心ををををねのかををこのかををあり

別所うへをくをかてをみて
をるけたる中や神やいさあ
所之　ひろまをてをるかるいひ一ちも
ひてをあをけふうあ水
所つあるい梅つあるこれみをちをうけのをにすをて
給をられ由をあきう所うつうもにあるうせをて梅つあ
まいをせをふ源氏ちむめつあれ世所乃所おやけふあ
ゆをて思をを流うをすをかの乃中将をを二月をを中納
ををうれちむすめ今れみうを十二れ年すう条をひかき

てんをてちつうひたは由ふ中納ををおをしをいうき上ま
ををあをてひうなをを由ををあけひめてかうせををうひめををひうをも
所ふううれ世所の学をとをうをふいをみ学ををの給をを所前
をて給今ひうをいやをひれすあるう大内の世房いをををふんを
をていをうう梅つあたうの由うを平内信の助信俊乃内信お将
今婦こをきをんの世所右うれちうの世房大江の内信女
中納今婦源氏れおををも所給をををの梅つあ学
所をて乃すまをうをて二巻乃給をを書所ををう
いをうをへ所ふかのう所をの学ちま所心おをあをきすま

[illegible]るあらはさせたまいふとうあ　これつねふ紫上の
みせまう給へとおもいまてはせ給ぬうちの給ふもて
紫　ひとりねてなるめりふ　なまれすむ
うちをかさうはてるへうきは
うきあみしうれおもいはいと又
はふうしかへまれあうちう
あうせ給ふ　給ものすは　伊勢物語給行とうの　おき邦の
給うつるれうつれ給いせ物ちうを　ゐめて
平四位　伊勢　ふうしのふうさ　心をたうすて

あうう　波やきつへき
行とうれ　おうをうあて　いせ物語をいやあうう
太　雲のうへを心ひれゐる　仏平ち
よいうれうこをもうふうみる
入道のうへ　御おうひけうして　給ふ伝授して　業平になりて
みうあうう　ふれぬ　年へす
伊勢　おうの　名をやうつめん
給ふもうう　ふうこを　うめて　朱花後ようむ　つ不代御
うへきんちう　筆れ給ふを　うれ中に　ゆうへいせへ

くるしかりしときのきたりせこの

朱雀

身をてらしあめわうんのかぶれ

心のうちをひらきて世界

安文

志ぬれうちをむりあるぬんちて

神代のこともいまうこひしれ

十三　雲風

あうしれうをむこうを俄て人中れ位ねをち

たるうをとをひて四石の尼君れたちちうの最の中勢れ

親王と少しうれ位を大ねれうを君あるうひ

いてくしくやとりうてなりきる男にかうひあをて

うれをすむへきうてのうの給ふ入京の後れたくうのひて

りけををたををれふいのるれちる

うをぬをを老のふうくなりきう

ものもに都をいてきこのうひや

ひとり野中れ道をはうん

こうてるれあを

四石上

いこうて又あひうんうをいつをう

うをうもをうぬ世おうをなのまん

尼公

かのさしも心よせあまなれ
うむさしかにけうまれる
幾とせゆきさふ秋をすごしきて
うきなのりてけきかつらん

大夕にはすまひ河ちかくのうのうまかひたれを
所へくる心ちもせず源氏はたとえ人形ゆくたれ
せと紫はしんおとり給ふ日数へうたゆるとはまく
うてるし家夕も立くたれせかの法形はれをもく
きてのりうるを四石はと上ちさちすすきうゆるて

尼公

身をうてひとりかへるふるさと
少しにうるはるうふて

尼公はれあにたらたちの家ふれをふるとなう

四公

ふるさとに尼はせを立をとて
ちへはるうをを涙うるらん

たうるうるて姫君尼はるめしくうしけうるう
たうるうふまき人うのうくちたれすを尼公はれ
うを源氏立より給て法師はれたるとひ近るやう

水れおとんちなけふきこゑ徒も

尼公

伝到し人をうへてたとれとも

ほかうやとのあるしうるまれ

ていひきつけるみやひうふよりうやふ

いさしかをとやしれうをえれを

かとのあるしやかもうせば

源氏これに佛堂をたてつまるまいりて經佛れ

ようをうをうをさて祈ひ十四日の晦日まあうをうやうの

念佛あるたうて祈ふをつかをふ大かをたちまをを自ふ

二をひの繋をいをう大かおとをれ人をかれう山佛と

あんと源氏の祈るしなうこれ佛堂を御覧れんをかも

しろきふをうれかんといふを大井をうこを佛まれ所を

大かをてかの形見れ琴をひきて

氏

繋をにをうぬ琴れをうをて

をうぬんのかをちしうをや

かをうをと繋をうをたのをて

雲れひいたをうをうをうる

佛をうをうれかん殿上人をうもひをくてたと

たゝ係なるはあるしの事まてうひともかうあし
まものなのさつたをいたらるこゝひを九月十三夜
ゆうべとゝまり御供あり

冷泉

毎れすむ川のたちるはたゝなれも
うつれるけちのゝけうまれらん

たゝはたゝをかうはゆゝしはたゝ

氏

久うこの雲なたちる紅葉のしたて

朝ゆふ立もはるの山はと
これ奇の心をうつれ院へり事を海ちきこへ給ふ心なる

中まおいうゝすんしはふ

月ヵ

久うこれ中よおいうれはとふれて
光をのうゝ毎のもへうるは
とふんるうれまれたるみさまいる何れうあやうさ
海て人ゝえいうはつ光の石れきはれをあちはの
めのまへるうをはまいて出て

氏

めうゝきてあるうゝあけさも
あうれ嶋のあうゝ月

以中ヵ

うゝ雲にたうはるは毎みの

位をつはよりはれけるとき

右大弁

雲の上は位家をすてよかの春

いたるをのりとしのかけくらしきん

十四　うす雲

あるれは姫君をきたりさみたりへさんあれたるくろくろる

やうふたゐあて生いんとかるしけるく紫の上はたるん

むくとうて雲ふたまふかつんとうひ行ふてあるの上す

源氏をらひ行ふ三戈乃みるはたとはさも紫はたる

みとたるあ行ふてたゐみをいたるも日をるすなて法

くらひめとるおるくらひ各殘るのくるあけさて

四月

雲ふる源山のみちはれさも

ふるふくるくるへ行くすして

めのと

雲乃那きのしの山をたつるて

心のくふあとくるやを

くらひるくさむ十二月ふたる市車をくるして所多つ

うるむくるたるたる市車をせるる所手毎君るくうつ

うるいくさていて行てるくるれ多をいるくるくるくる毎

君る車みり行てる神をくるて引る毎君

すぎたるさき二葉の松を引わかれ
いけるかゝしをみるにつけてもいとゆかしくおぼえたまふ
式　生ひ初しはつもとのふかくさをとて
雲ゐ二葉の松をなつかしみ
こけくらべ松をみちのくに二ゝ行へてあるかな
こけくらべ海の松を二本を都人
いかゝ見さかりなるへつゝ
紫は上をいとゆかしきおもひをえたまはてのまゝにつゝみもあへ

すつゝけたるをくるおとすあるつゝをつくるは人をなり
ふこれをもかの大ねをなりちめくさをちへえるをれてい
るをふらんとをくゝ松わせをあもしをすけをあ年かへて
たゝ大ねへけるをなりふていくゝたさあちをさて紫
の上ゆをゆををへを姫君御すをにまつをれてををひをを
さりをへたをてあすをへををををををををを
紫　あををもるを松ちかを人のをくはをて
あすをへををををををををを
式　ゆををてみをゝあすをちをををん中をを

たちかへ人をて心ちそもの
をもはいとうてゐの光も雲れあすまひもたるは
ものゝ世人たちとうせもの笑くれうゝ人みをかの
あやゝをもなへてゐぬまとゆあつあう源氏れ
たちうちんのうちゆつゝいかすたすてうう
うゝ文ちなんやうのうゝかゐるう天う西身ゆ指設大設大臣れ
下のちちんうてたるやけへまゐる文ゐう
設ぬせれたゐゝまておうすきをみうもも源氏笑なけ
ふ又三月毎ゐる足うれ毎入道乃文かれ設世中ゐへて
ううゝうううて和のうへゐさまゐ源氏のたうら伊ふ

ゝへうれ所なさけのををたるゐなけゆ設たあれさ
かうゐ人めをつゝをゐさくゝ設ゆ山きられうすふ
ひゐううすゝふれを

入日さすみのふたゐひくうす雲ら
和ふふ祇ゝ笑やはうゝゐる
これ宮ゆへ巻をうす雲ゝゐつけう入乃れ文も山巻ふ
かゝれ設へをうす雲れ女ゐんときいつゐあうこれ女ゐんと源氏
つゝうう志のひ設てみうゝ源氏れ御ゐゐう世ゐ
設下ゆ設へ設ゆへゆゐなをて雲の光も雲れ

きゝ所もたゝなるに山ゆくるみゝを御てらしたもせしまりこゝろるるやうふとたいのゝ中殿ゝ侍ありあくる夜れ曉ひとふ御門まゐりたるみゝをいとはまゝしこゝろのゆふたかりめてこゝろおもたかせまゐすを後年源氏を見てはつゝ所ふもかゝしけるゝゝ所ゝて御位をゆつりやさもしの給へる源氏うけひき給はりまゐらせる車をゆりてきん中ふいて入給ふ車ふうしふけすして人のひく車ゆり出んしやうふ出れ世御をひきすゝ源氏の御りをたちふて時ゝそ侍て給ふ秋の雨ものやたゝるゝ

日源氏ゝれたゝふまゝりゝ給て前栽をこゝ所ゝひもとを
ゝりるまれゝ中給ふ

月令

百草れ花のひらゝゆふ菊ふ
おりる多ゝまん人ふこゝろゝ
こゝふんゝゝ源氏れ所ゝ侍ふ侍ゝ人のふ歌ゝ秋と
ゝふゝて侍ゝゝゝ人ふこゝ歌ゝ秋と
ふゝゝ秋をあゝれゝゝて侍ゝゝ歌ゝ
梅つゝふゝゝゝ中ゝ給へゝ歌ゝ御ふゝゝゝ
ゝゝゝ歌ゝ秋ゝれ給ひゝゝ
ゝゝ歌ゝ秋ゝれふ侍ゝゝゝ給ふ

ゐれたまひるせも

君もちてあるれちらせ人志賀寺

うつる身まもる秋はゆふせ

山河辺秋好とをつけうう大ゐ屋住るまふいと

さいしけまて木ちけき中ようかつ火乃ゆ石めるやう岩

蔭ゐ海ひるをうるるふしを石海ちまうとて

いちうせうけ志まぬうう火ち

舟はうさ舟や志ひきうん

清うぬ志れんを志ゐ海ちや

ふるるの乃火乃うけちちはきふ

十八　あさうを

桃うの式部巳の文ゐ上天王れ御井源氏ふよ

御わちなういるれやまれたいもを桃うのよいうう乃

ちむすめを源氏いうへうちんるけてちふうるひしう

を氏はうもれいつきうう力行ひぬるをれ氏文うす雲れ

巻るかれ行ひ氏ふるまりてかいるをなうぬ行へう源氏

きいう乃御くをるれを行るうめ行うを

人志ます神れゆうを行うまふ

さらつきあれば垂をとりかへる
ゑてよれあるをばとりたうふうに
ちらひしてゝ神やいさめん
雪ふれあしき物ゆゑなくて桃ろのゝ
八ゝむらの露をしぬぬ物ゝ不れ
ちるのはうふるやしぬん
秋もてゝ雪の降るにむすれまき
あるゝなさかるうゝ物ゝ不
かやゝの奇也筆をも姫君をも物ゝ名つけう無院

むゝ物ゝ桃ろのゝすゝ所ふ此桃ろのゝゝる女の宮として
源氏ふゝの所おもも位所ひきゝ居公をもるゝ所一人すゝ
世のはゝゝまいるゝかゝつけて源氏ち無力んれ所ゝ系所ふ
今ハむゝゝちてせるゝゝう源をいつまるゝゝゝみりひて

式

はれるゝ式むゝにゝうぬんゝ
人れつゝきれゝてはゝきれ

世九

あゝためてゝるふゝんゝむ人ゝゝる
うゝゝゝ宮しゝんゝゝゝ

廿人の宮ゝ所けゝひもふゝゝゝゝかちふゝひ所式

ちきとゝ志ゐていひさとゝ
ゆゝみるなりて又世ゝれゝゝ
ゝのゝゝの志ゐれゝゐゐて
氏
いゐれまるゝゝ
雪ゝる里ゝあゐしゝゝ
かの源ゆゐゝゝゐ人の
世ゝの
年ゝれゝゝれ
おゝやれゝゝやゝゝ

百三十一

源氏れゐたゝゝゝゝゝゝ古院ゐゝ八幡ゐゐゐゐゐゐゝ
ゝゝゝゝふゝて
卯ゝゝて後ゝ行ゝの世ゝて
ゐゝまひすゝて無院の御ゝ
中ゐゐゝも無院ゝつゝゝゝ
ゝゝれゝに紫れ上ゆつけゐひ
ゐゝの
ゐゝふる雪ゝつゝて松ゝ行ゝ

[illegible]人の[illegible]も[illegible]てみる時[illegible]につけて人の心をう
つすめるもの紅葉[illegible]の[illegible]もみの夜れする月か雪乃
ひかりあひかるるきいろいろるき雨の[illegible]みてこれよりかまて
[illegible]ひかられすき[illegible]たかにいひきん人のまちあひ
より源氏みす[illegible]なるあかつきすこのかて他乃
こかう[illegible]えもいかんすこ[illegible]ふうにけふるなかて雪まか
[illegible]て御覧すなかく[illegible]ふつけきれもえも
うこうけてふかり池水いかにむすひてみる

紫

氷[illegible]いけ[illegible]れかもりかやこ

[illegible]も自れうけうかこ
おけれちかさ[illegible]た
[illegible]むかし[illegible]き雪もよた
あ[illegible]を[illegible]ふれを乃一却
入[illegible]も[illegible]ま[illegible]いかき[illegible]心[illegible]ふと[illegible]
[illegible]れ世[illegible]の[illegible]をおかすん羨ふ乃[illegible]
[illegible]て[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ひき[illegible]夜る
むかし[illegible]る羨れみ[illegible]
あけ[illegible]ふ[illegible]ひとちすを[illegible]

ちぎりをふかくかたらひそめしも
かけしらぬ　のちのせをやはらん

十六　乙女

年ゆきて文はしるしもすさまじの中　笑あるいたまるる衣くの
ゆくえはあるかもれまるるの法ち大ふれ空心ちすけはふと
前世院を法まるとあるあ法まみるれの日ち大殿源氏ふいふ
れとやうれたるらんとふひやうふ

かけ法や川瀬の波も立かへる
君もこんとはきれ花乃やつまを

これ老ふ大殿ふの為れ法ふ　ありやそは法ふ
法ふん法れ法ふの人ふひるを源氏れ御心ふ
とあて六法て殿上ふ加ふ法ちやふも法ふのきぬ
ふふふふはつせつき法ふのふふ加ふんふ身をふ
んふふかふふれ付　老中　ふふめをんなは法
ふふぬふふふ法いせふて人をふふ源氏のたふ
法ふんふふふふふふふふふたれ法ふのちかふんの
さいふふふ人ふふふあふ法ふふん法ふいふはふて法きけ
てもふせの中ふ入法ひ大内記ふ師ふ法ふて文をふし

[illegible]れかたち大夢れ君又宮れ君とも[illegible]いまてもと
れ大夢のもとにうちなけくとも大夢れ宮もとてもかつまんも
[illegible]ふまれて[illegible]ちまもすまも中なとこれ比ち
内のれとともきう秋姫世御きたるうちなけくを秋姫中夢と
きいつるを源氏も大殿大臣もあり給へりかの内れたとまち
こうきてんの世御きう姫君いたらし源氏不のうちう又姫君
一人ありそうこのたえまあつけや給う大夢れ君とおさなく
うをんちをかう給ふをちおとつ中つけ給て姫君を家方へとう
ふ給へて大夢れ君もいとうあしく思ひひめ姫君なひ

[illegible]れてよろつ[illegible]ひのうちと雪ねのうちも歌とやと
ひとうちなけ

[illegible]

雪　[illegible]る雪ねれ[illegible]ものうちや
[illegible]れさすめ[illegible]ん
[illegible]ふんかこれちすれゆへ雪ねれ[illegible]大夢の
君これうちきて

ちよ中ま友[illegible]
[illegible]中秋のう[illegible]
[illegible]ひとうちい[illegible]姫君れ[illegible]大夢れ君[illegible]あさき

[illegible]て物のもあまた住すませたまふんと
いひしかど大学の姫君[illegible]思ひていめんの有るをなげきて
いとゝなほめさほ[illegible]やうれきに[illegible]て

紅の涙ふかき袖の色に
淺みどりとやいひもかるべき

笑ひに[illegible]れうさかの[illegible]
いろの深きは中れうきそう

かゝて父たゝくゝ[illegible]たゝぬきと少され君たちも
こゝ[illegible]る心も人[illegible]ふさ[illegible]るまゝと人[illegible]みえんも

くるきれて学の文所へいくとて

君こゝろうとてもむすこ[illegible]あけ暮れ
[illegible]ふるなくらう郎

かゝてゝ[illegible]ふ節いふ[illegible]尼君はふ年ふる源氏の大殿れ
まひ姫ら兄の旗[illegible]れむすめふ年ふるゝ内ゝてよく
ふ[illegible]て学ふるゝて大殿[illegible]ゝまゝ[illegible]せゝ大学の君を
心もふゝさむやゝて立いてゝまゝされあるき給ふ[illegible]の無姫を
内のゝきてゝ[illegible]ゝたゝ[illegible]れ姫君れ大きに内なる心ゝ[illegible]て
きぬれすゝゝひきふ[illegible]て

あめふまずしてよわり姫れまひしかも

あら心さすしめをりもろ姫

うつうされとあたふうらもつけあるや

月分

乙世ゐの神ふる山乃うつれ乃

ひかりにしよりてこひろめてき

源氏れ大殿年伊勢へ行幸あり又荒れ宮乃事ゑいて

みるを　十四日てつうすすきふるもるて

のろし人のうるうさよれありの日つうすすきふるもるて

乙世ゐの神さひぬん天はゆ

ふるまよの方よりひへぬるとて

ちるつ　まうすれうるてうのへすやたうこうすうえうて

海きうしるかさちゐ人のゐとうゐて　たうくちゐすす

又年

うけてうてけふのてうて　たるゐの伊

日うきれ東　東乃神ふうけしも

毛ゑのむうあれ年姫のううく

大学君

日　新うもしほうきめや乙世ゐう

あまつうてふうけしいうゐを

年もうへうぬ二月十日朱雀院へ行幸あり花乃ちうきまう

しれけるれとうてひうけるちうふうまうあていとなす

ろしまいのかぐのあるこゝにまうでゝえらぬ所あるひとり
おの師ふとゝ色さすうれひ色ふゆるゝかしゝゆゝ十人おも
めしうゝ心うれ影おを大殿の少され君の行ふ色きなり
心うれ影ふたゝ色けうくゝさるゝ詩の形し学の文のうけるる人されと行るゝ色
ふんのつくきの作るゝものゝ作あるひとふんのつくれ琴ふたゝ色けれ作あつくれ琴ふり
うゝ徒を徒へめゝてひゝ行ふし

式

学れさへ作る智ふむしゝふり
むつまゝ花ふけうゝ行ふ
師ふと学ゝ今兵ゝ行ふ行ふ
伊ふへゝを吹つくゝる節行ふ

さへ作ふ名れゝうゝしぬ
ゝ学源氏六條京極ふ四町をあて御殿つくりあるかゝ
くれ作ひゝ学ゝひてすませきこゝ行ふ五ゝ紫の上ゝう
ミ乃町これゝゝ源氏れ住ふ一あり箕ゝれ作る星れ
上ゝうれ町秋ふ六條れゝす五れ作ぬゝふの作あれ
秋好中ふ住ふとゝのゝれ作ふに作あ行ひつれ町に乃ふと
ゝふゝあれ上すゝ行ふいぬいの町ふのおゝふふ
あひゝゝゝゝへいゝ屋ゝふゝけ作きゝ行ふゆき
ちゝて住ふ作ゝ作へ行へり五れ作住ふ池の作ふゆゝ

ふひろく拾ふとなる　ゐの山にも花れ木とも数をたくしを
うへられしまへちうに　前栽ふ　又えくに行ふ　萩山吹いろ〳〵
しゆれ春の初はなりふ　雙秋乃せんさい草木の
いろもいろ〳〵　初のふかうもれ　ちるもの　ちるもの　行ぬ　すゝけ
なれいつゝをたゝへて　雙うけふよれう　卯のむちゝ　きかき
をちゝふゝ　ゝもゝ　ゝもむゝ　ゝ　ゝ　

てあるらん色のように染まれるもの なるべしもに
えんをもむすぶへき菊れ侍るさうなるもち
ろいたさく名をしる人ぬ深山木なれ本姿くた
りしろきうへて山里めきさうまくちる紅せんさいみ
るんなうるれもかあさうくらもうひうんの
ちろうみふくうつろひ行ける秋れ所の紅葉はしろち
えもいうぬ葉うあり神ふ自れもめるせすこ吹
うるゆふくれ紅葉はるふとのちちしはるれも
みしきうみゆるを葉のかにひろい入て秋ぬ中之

ちもしちされ上へなり行ふ花やるれうへりへ
れ大内のさふひなまてりさなりうねもする徒
さうたうなへしれうさん紅葉かさまれうきぬ志
おんのあうあんとるれきてうは行うとのなる海
ちくあやうてまてまいるはせうろうこにち

心うう美まつうれちりやとの

お葉をうせれはふうるみの

御ふこれをこのあうけしさ岩れ心をて

お葉の枝をつけ行へりうさ女唐いてはつうはと

をてふす

くせふちるあ葉ちかろし夏れもを
いち祢の雲をうけて春みめ

ちくとてあへてもこひしう行へるとくめてをの人へう源氏
れたとも古殿してこれをみちの内やうこいと祢さ
しや此ころ紅葉をちくさんふちくに姫乃うしこをる
ぬすしくちをちきてちを邪はかけるうまてこて内ゆさ
てちをふちいとあとちをふ人のたやけるれ内あるし
心なり初